

報告

少子高齢化・人口減少時代の地域に定着する 看護師・准看護師育成

医師会立准看護学校の入学卒業後動向から

小樽市医師会看護教育部担当理事 澤田 香織

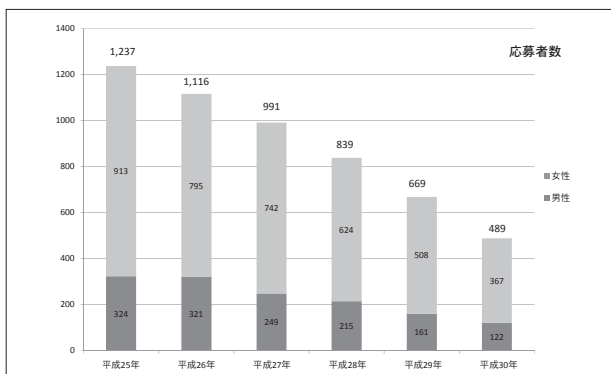
はじめに 准看護学校の存続を脅かす少子高齢化・人口減少時代

ここ数年全国的に准看護師課程では、学校数、応募者数も年々減少し、定員割れの学校も目につくようになった。日本医師会の平成30年医師会立助産師・看護師・准看護師学校養成所調査によると、すでに平成30年3月閉校が4校、平成30年度募集停止が6校あり、その運営は厳しさを増している。北海道も同様の傾向にあり、地域人口減少が応募者数減少に影響している。若者が大都市に流出し、その減少は地域の看護学生の質、さらには学校そのものの存続に大きな影響を及ぼしている。7月8日（日）に開催された平成30年度医師会立看護職員養成校連絡協議会で9カ所の医師会立准看護学校における入学卒業後の動向をまとめ報告した。北海道における准看護学校の現状と課題を考察する。

I. 入試の動向

1 応募者数の推移

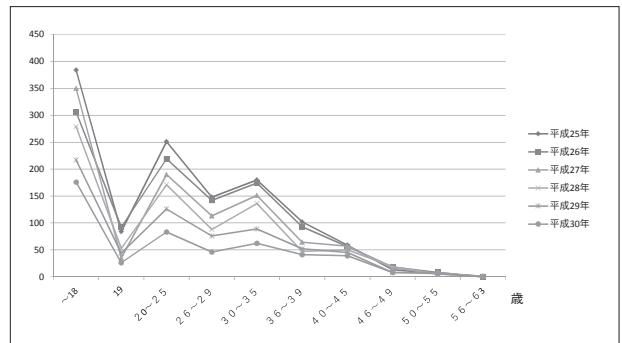
応募者数は平成25年1,237名を100とすると、平成29年669名54.1%、平成30年489名39.5%まで減少している。平成30年の倍率は、募集停止の函館・苫小牧を除き、最低が北見の0.8倍から最高は小樽の2.7倍、平均1.6倍であり、すべての地域で年々低くなっている。地域においては3年課程との併願が多い地域もあり、みかけの倍率以上に深刻な状況にある。



2 応募者の年齢の推移

准看護学校の特徴として10代から50代まで幅広い年代が存在し、その割合はここ5年変わっていない。

もっとも多いのが18歳～19歳が41%、20代が29%、30代31%、40代以上は12%。5年間に一番減少しているのが10代20代である。



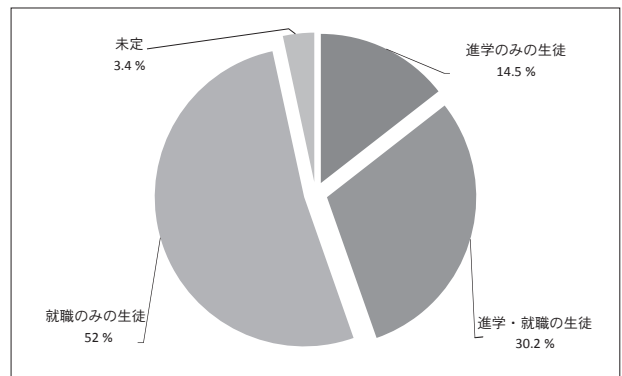
3 応募者の地域推移-応募者の住所を4区分し地元との関わりをまとめた

市内出身者が51%、近郊が19%、ブロック内17%と、市内出身者が約半数前後、近郊およびブロック内と合わせ85%以上を占め、この傾向はここ数年大きく変わっていない。

II 進学就職状況

1 進学・就職状況

調査時期が4月のため卒業時未定が3.4%いるが、卒業後、准看護師として82.2%（就業のみ52%、就業および進学者30.2%）が就業している。



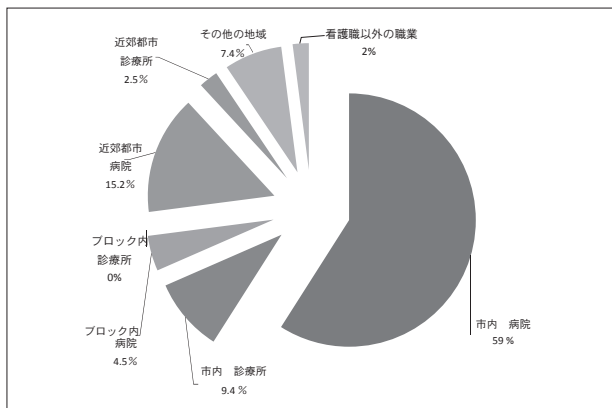
2 進学率

進学率は地域によって大きく異なる。進学率が高いのは、同一市内に進学課程を持つ小樽、旭川、また近郊に持つ上川北部、北見であり、その他の地域では低迷している。

平成29年度	旭川	岩見沢	小樽	上北	深川	帯広	苫小牧	函館	北見	平均
(%)	60.3	10.3	70.0	61.1	23.3	30.0	29.0	49.1	62.5	41.9

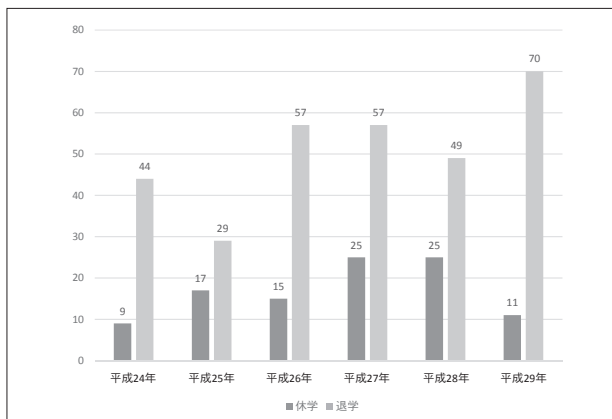
3 就職先の状況

就職先は、市内病院・診療所に68.4%就業し、近郊都市を含めると86.1%、ブロック管内で見ると90.6%の卒業生が就業し地域に定着している。



Ⅲ 休学・退学状況

2年間で696名の定員に対して、平成30年退学者は70名10%および休学者11名であった。休学者は減り退学者が増加している。



考察 医師会立であるからこそその5つの特徴

入学・卒後動向より、医師会立准看護学校には他の看護師育成課程にない下記5つの特徴が見える。

- 1) 入学資格が中卒程度でありながら、毎年すでに短大・大学卒、大学院卒が2割程度を占める。受験のレベルは決して低くなく、さらに社会人入学比率が多く学び直しの場合といえる現状がある。
- 2) 応募者の中にはすでに介護福祉施設で介護者として、医療機関では看護助手として働いている方の志望も多く、働きながら勉学し准看護師資格取得をめざす学生が多い。
- 3) 進学率は地域によって大きく異なるが、看護師育成にも貢献している。
- 4) 地域または地域近郊ブロック圏内への卒後定着率が9割以上と非常に高い。
- 5) 地域の准看護学校はそれぞれの地域に根差した看護師・准看護師育成を図っている。准看護教育は完結型教育であり、准看護師として地域に定着することを目標にした地域もある。一方では急性期病院での准看護師の採用はほとんどなく、進学が決まっている場合のみ採用されている実態もある。進学を推奨し看護師としての定着が望まれる地域もある。

私たちは准看護学校として存続すべきか3年課程への転換または廃校が望まれているのか

日医の全国調査では応募者の倍率は平成30年は最高で3.5倍、最低で0.4倍（平均1.4倍）である。定員充足率（入学者/定員）平均85.8%で100%を満たしている学校は半数以下の36.8%しかない。平成30年度の北海道7校においては、応募者の倍率は確実に下がり平均1.6倍、定員を満たさない学校は4校ある。地域の人口減に伴い、年々若い世代の応募者が減り、地域の3年課程ですら3次募集をする時代となり、今後ますます減少していくことが予想される。また、倍率が下がることは、定員を満たすために成績下位から引き上げなければならない、学生の質にも退学率にも影響する。

地域における医師会立准看護学校の果たすべき役割（貢献）を今一度考えてみていただきたい。地域からの応募者はその地域に定着する可能性が高い。地域で大切に育てれば地域で育っていくことが期待できる。医師会立の使命として地域に定着する看護師・准看護師育成が重要である。北海道内9カ所の准看護学校では、平成30年度苫小牧が募集停止、函館が平成30年度で閉課し3年課程へ変更、上川北部は平成32年には廃校の方向へ動いており、北見も平成32年度に閉課が決定している。准看護師育成の役割は地域のニーズ、地域医療の継続性に配慮しながら検討していかなければならない。地域からの理解を得た上で公的補助金を得ているが、厳しい財政状況にあり医師会として看護師・准看護師養成という地域貢献はどうあるべきか、地域とともに考えなければならない。

まとめ 地域に定着する看護師・准看護師を確保するために

将来推計、看護師が13万人不足するとされている現在、確実に地域に定着する看護師・准看護師育成は医師会の責務である。地方では、都会からの流入は厳しい現状にある。准看護学校は医師会立だからこそできる地域に根差した看護師・准看護師育成を図っている。全道の准看護学校の動向や地域の特性について意見を交換しながら、応募者の確実な確保、ニーズに応じた健全な看護学校の運営について地域全体で考えていかなければならない。経済的なバックアップ、地域完結型の臨地実習、専任教員確保・育成など理解と協力を心からお願いしたい。医師会立准看護学校の存続は地域の若者人口の確保、地域定着は地域の活性化にもつながり、もはや医師会だけでなく地域と共に検討すべき問題といえる。